

[報告]

JICA近畿大学連携ボランティア事業

—ペルー共和国野球振興支援ボランティア連携に参加して—

近畿大学産業理工学部経営ビジネス学科

1. はじめに

JICAは、日本の政府開発援助（ODA）を1次元的に行う実施機関として、開発途上国への国際的な支援を行なっている。「すべての人が恩恵を受けるダイナミックな開発」というビジョンを掲げ、多様な援助手法のうち最適な手法を用い、地域別、国別アプローチと課題別アプローチを組み合わせて、開発途上国が抱える課題解決を支援していくことを掲げている。そのJICAを通じて、短期ボランティアの野球隊員としてペルーへと2013年から派遣されるようになり、今年で5度目の派遣となった。

中南米に位置するペルーで、最も人気のあるスポーツといえばやはりサッカーである。野球は日本人の間では人気のあるスポーツであるが、ペルー全体で見ると競技人口は約2000人程度で、年々競技人口は増えてきているが、とても人気があるスポーツとは言えない。また、野球道具の不足や、球場設備の不備も目立ち、野球をする上での課題も多くなる。そのような環境ではあるが、ペルー野球の競技人口のさらなる増加と、野球技術の向上を図ることを目的に現地での活動を行なった。

本稿では、ペルーで実際に行なった活動内容や、日本との文化の違いなど感じたことを報告する。（川口恵大）

2. ペルーの歴史、JICAボランティアとは

青年海外協力隊（JOCV: Japan Overseas Cooperation Volunteers）は、民間の青年団体が先導し、青年政治家がそれに呼応して発足したというユニークな歴史を持っている。

1965年（昭和40年）4月にわが国政府の事業として発足した。事業の実施は当時の海外技術協力事業団に委託され、同事業団の中に日本青年海外協力隊事務局が設置された。

その後、1974年（昭和49年）8月にわが国政府が行なう国際協力の実施機関として※国際協力事業団（JICA: Japan International Cooperation Agency（現国際協力機構））が発足し、その重要な事業のひとつとして受け継がれ、名称も青年海外

協力隊となり、今日に至っている。

（橋村佳樹）

3. JICAとペルー野球ボランティア

ペルーに青年海外協力隊野球隊員が初めて派遣されたのは1984年のことで、初代隊員は大森雅人氏である。その後、2代目野球隊員として櫻井国広氏が派遣されペルーの野球普及に尽力を尽くされた。

しかし、1991年JICAの専門家がテロリストにより襲撃される事件が発生しその後ペルーに野球隊員が派遣されないまま4年の月日が流れたが1995年に櫻井氏の高校時代の恩師である佐藤道輔先生を中心として「ペルー野球を支援する会」が立ち上げられた。野球道具の支援や、佐藤先生の実費で野球隊員を派遣するなどの活動によりペルーの野球を支え、今に至る。

現在ペルーに青年海外協力隊野球隊員として短期ボランティアで派遣されているのが近畿大学の学生でペルーとJICAの間で締結されているのが今年最後の年でそのような記念すべき年にペルー野球の普及に当たれたことは大変貴重な経験になりました。また、今後もJICAとペルー野球連盟の方で今後もこの活動を続けようということになっているのでこの活動が今後も続いてたくさんの学生にこの経験をしてもらいたい。（中石康貴）

4. 近畿大学の派遣に至るまでの動き

私たち、短期ボランティア隊員は12月に東京渋谷区代々木にある東京オリンピックセンターというところで2度目の隊員の人は3日間、初めての隊員の人は5日間の研修を行った。研修には短期ボランティア派遣隊約100名の方が参加した。

研修では、朝から夕方まで講義があった。講義内容は大きく分けて3つに分類される。「感染症や狂犬病などに関する健康管理」、「交通や盗難などに関する安全管理」、「社会的多様性理解」この三つである。これら海外に行った時に必ず必要となることを講義で学び最後にテストを受け理解できているかを確認した。

講義の中には実際の海外の交通状況の映像や実体験の話、その時やその場に合った対応の仕方など知らなかった現実や行動の仕方などを学び、日本の当たり前が通用しないということを改めて感じる事ができた。また何度かグループワークがあり職種や年齢関係なく様々な方々と意見を交換し、たくさんの知識を得ることができた。他にも、派遣国別に分かれ実際その国に派遣された方の話を聞き、質疑応答をする時間も設けられた。自分の派遣国について具体的に詳しく聞くことができた。このような研修を受け

約1ヶ月間の短期ボランティアに参加した。大きな事故や怪我をすることがなく無事活動を終えることができた。自分の身を守るためには知識と準備が必要だと身をもって感じた。

(茂田雄也)

5. ペルーの歴史

ペルーに相当する地域はコロンブス期のアメリカ大陸で最も高度な文明が発達した地域である。15世紀に諸文化を総合する存在として現れたタワンティン・スウユ、あるいは後世インカ帝国と呼ばれることになる国家は当時の地球上最大級の国家として繁栄した。1533年にタワンティン・スウユがスペイン人の征服者、フランシスコ・ピサロによって滅ぼされた後、スペインの領土となったアンデス山脈一帯はペルー副王領として再編され、リマは南アメリカの西半分を統括した副王領の中心地となったが、植民地時代を通して現在のペルーに相当する地域は徐々に周辺地域と比べた衰退が明らかになっていった。1821年に独立を宣言し、1824年に独立を達成したものの、その後内政は安定せず、1879年から1883年まで続いた太平洋戦争ではチリに敗北し、南部の領土を割譲した。20世紀に入ってから内政は安定せず、経済的にも社会的にも低開発な状態に留まり、1968年の軍事クーデターによって成立したペラスコ將軍の軍事革命政権によって実施された一連の社会改革も、ペルー社会に肯定的な影響を及ぼすことはできなかった。1980年の民政移管後には深刻な社会不安と経済危機に見舞われ、左翼ゲリラと政府の間で内戦に陥っている。また、1941年からペルーはエクアドルとアマゾン川流域の低地を巡って数次に及ぶ国境紛争を繰り返して、1998年に最終的にこの紛争に勝利して広大な領土を併合している。

(小松寿親)

6. ペルーでの活動

配属先は体育省傘下のペルー野球連盟でナショナルチームやコーチの育成・指導の他、リマ首都圏における競技人口の増加、レベルの向上を目的とした普及活動を行っている。ペルー国内での競技人口は徐々に増加傾向だが、野球道具の普及と指導者の育成は非常に遅れている。また、ペルー野球連盟と各地域の野球連盟が上手く連携していない現状があった。ペルー野球の発展と言う一つの目標に向かって、野球連盟が各連盟と協力し合っていく必要性がある。

近畿大学の学生12名はアエル、カヤオ、コマス、バルボネス、サンボルハなどの運動競技場で野球の指導と普及活動を行った。慣れないスペイン語を混ぜながら野球の基本動作を子ども達や現地の指導者に対して指導を行った。野球普及の面では野球のデモ

ンストレーションを行って野球の動作であるボールを打つ、投げるなどの体験をさせた。また、活動の面では指導と普及活動だけに限らずペルーで開催されていた大会に参加し、交流試合を行った。

今回の活動で野球の基礎となる動作やケガ予防のためのストレッチ等の紹介をするこゝとで、現地の人にペルー野球に足りない部分が見えてきたと思う。私達が指導しているところを動画で撮影している指導者もいたので、今後も私達が指導したものを続けてくれるのではと期待している。また、慣れないスペイン語ではあったがコミュニケーションを積極的に取ることで近畿大学とペルー野球の関係者との関係をより深めることができた実感している。国境を越えて違った言語、文化、習慣を持つ人々と触れ合い関係を深めることは微力ながらも国の相互理解に繋がっていくと考えている。

今回のボランティア活動を通して、一つの仕事をやり遂げるには周りの協力が必要で、周りの協力を得るには相手を思いやって接することが必要だと学んだ。ペルーでの活動で多くの人からの手助けを受けて活動することができたと感謝の気持ちでいっぱいである。

(上杉恭平)

7. CALLAO

カヤオでの活動は、野球の認知度は比較的低く、バスケットボールやサッカーなど他のスポーツを行っている子供達の方がかなり多かった。子供達の野球技術レベルもアエル球場で教えた子供達ほどのレベルではなかった。だが、新鮮なスポーツな分、子供達の目も輝いていた。前任者の活動の成果か、グラブを綺麗に並べてたり、日本の野球文化も強く示されていた。しかし、道具を大事にするということに対しての理解は無く、グローブを投げたり蹴ったりする子供ばかりだった。自身のグローブを大事に抱え込んだりするなど、ジェスチャーを交えながら教える事に工夫を施したが、何故大事にする必要があるのかに関しては、文化の違いもあり、的確には伝わっていなかったように感じる。

技術指導に関しては、子供達のレベルが高く無い事もあり、U12の子供達には、練習前後のストレッチや、キャッチボールの基本動作など、基礎を中心として指導する中で、楽しく野球をしてもらう事を意識した。U18の子供達に関しては、野手はバッティングの基礎、守備の走りながらの捕球体勢など、少し細かく指導することも多かった。ピッチングに関しては、フォームによるコントロール向上と、球速アップとバッティング改善に結びつけての、入念なストレッチ指導を心掛けた。

全体的に子供達は、真剣というより、楽しくしたい、という気持ちが強いように思え

た。一緒に活動して自分も、忘れかけていた、純粋に野球を楽しむ気持ちが、芽生えたように感じ、和気藹々と活動に取り組むことができた。(具志虎河)

8. AELU

AELUとは日系人が創設した総合運動施設である。施設内には野球場だけではなく、サッカー場、フットサル場、テニスコート、屋内外プール、陸上競技場などスポーツをする上で万全な設備を整えている。また施設内にレストランや売店も兼ね備えており、そばやカツ丼などの日本食も用意されており、AELUの施設内でも充実した生活を送ることが可能である。施設内の中でも日本語の看板や、レストラン内の店員は日本語を使えるということもあり、日本人である我々も気楽に生活を送ることができ、親近感が湧いた。

今回の派遣ではAELUを中心に野球指導を行った。午前中はU・18、午後からはU・14と年齢別のカテゴリに分け指導を行った。練習内容はアップから始まり、バッティング、ノック、課題練習の流れで行った。バッティングやノックは我々が実際に行っているデモンストレーションを中心に言い指導した。ペルーの生徒は基礎基本が出来ていないまま応用に入っていたので基礎基本を中心に指導を行った。

また今年もAELUで行われる大会に参加させて頂いた。昨年度は準優勝で終わったが、今年は投手を中心に守りからリズムを作る野球を展開することができた。

初戦から決勝まで一度も負けることなく優勝することができ、昨年度の屈辱を晴らすことができた。

この球場はグラウンド整備が行き届いておらず内野はイレギュラーするということも前提に守らなければならない。また日本では想像がつかないであろうが、マウンドが木製できており、日本人もペルー人共に苦戦していた。

最後にAELUの施設関係者、私たちを温かく迎えて下さったペルーの人々には感謝の気持ちでいっぱいである。(宮崎正智)

9. 試合の様子

リーグ戦に出場していたペルーのチームは地域や年齢で分かれてチームを作っていて、日本の草野球のような感じでした。

私は試合では投手として出場したがこの球場も整備されておらず、グラウンドはデコボコでマウンドは木の板が張ってあるだけでペルーのピッチャーも皆投げにくそうにしていたのを覚えています。

ペルーの野球チームは同年代の日本のチームに比べるとお世辞にも強いとは言えないが、野球に取り組む姿勢であったり、1球に対する集中力や信念といったものは日本と何ら変わらないように感じました。

日本の選手とペルーの選手で大きく異なる点はやはり日本人に比べ彼らは、身体が一回りは大きくて手足が長く身体能力がすごく高いので、たまにびっくりするようなプレイをやつてのけていました。しかしその反面、簡単なゴロが捕れなかったり変なサイングをしていたりと基本となる動きができていなかったように思えました。

そこで私たちは子供達に技術指導をする際にまずは基本となる形を教えてそれを毎日繰り返し行うことで土台となり、いろいろな応用ができるということを伝えました。ペルーの子供達は毎日コツコツ積み重ねるといことがあまり重要と思っておらず、違う練習を教えてほしいと言ってくる子供もいましたが練習を続けてくれる子は少しずつ着実に上手くなっていき、その子たちを見て他の子も練習を頑張るようになってくれました。

彼らは恵まれた身体を生まれつき持っているもので、この1ヶ月間で指導をした子供達が基礎基本をマスターして互いに切磋琢磨していけば日本のチームにも負けない素晴らしいチームができると私は思います。(屋比久大人)

10. まとめ

私たちは、今回で近畿大学の短期派遣ボランティアとしては五回目の活動となりました。活動の内容としては、野球指導や野球普及活動、社会人チームとの交流試合を行いました。

野球指導は、十八歳以下の子供たちを中心に教えました。野球指導をしていて、ペルーの子供たちは活発に行動してくれて、私たちが指示したことに對して、一生懸命取り組んでくれていました。その中で、気付いたことはペルーの子供たちは『なぜ』という疑問をよく投げかけてくれて、とても追求心があり日本の子供たちにはあまりないものを持っていることに感心を受けました。また、野球指導を行っていても、技術の向上が早い選手は、私たちの言うことをしっかりと聞き、質問を多くする選手が上達しているのを感じました。課題としては、指導者の育成不足が挙げられます。選手が指導者になぜという質問をしても、頭ごなしに怒っている場面が見受けられました。指導者の方でも、熱心に学ぼうとしている方もいるので、指導者育成のプログラムも必要だと思いましたが。

今回、野球普及活動を地方の三ヶ所で行いました。普及活動では、野球の存在を知ら

ない子供たちには、実際私たちがデモンストレーションを行い、野球のことを知ってもらうことから始めました。それは、子供たちも見ても喜んでいて、簡単な野球体験をやってもらったら目を輝かせていました。これから、また近畿大学のペルーへの派遣が続けば、このような子供たちに野球普及・指導を行い、野球の楽しさを覚えて、野球から学ぶものを感じてもらえるような活動を行っていかうと思います。

このようなペルーでの野球普及・指導の活動を行って、周りの方々のサポートがあつての活動だと思えます。また、私たちがこのボランティア活動を行って、培った経験を多くの方々に還元していくことが大事だと感じました。近畿大学の代表として、ボランティア活動を行えたことを嬉しく思います。

(大森貴昭)

参考文献

JICAボランティアの歩み

www.jica.go.jp/volunteer/outline/history/

JICAボランティアの事業概要

www.jica.go.jp/volunteer/outline/

